志雲会東京第一回勉強会

テーマ：「古事記　大国主命の国譲り」　要約（その６）

松田　武

いよいよ古事記のストーリーは大国主命のお話に辿りつきました。

本論のテーマである「大国主命の国譲り」について、古事記作者は大国主命の冒険物語に多くの字数を使っております。その意図を汲んで、因幡の素兎（しろうさぎ）から話を進めようと思います。

鳥取市にある白兎神社

９．大国主命の冒険物語

（１）因幡の素兎との出会い

「いなばの素兎」のお話は「いなばの白兎」として知られておりますが、物語の展開をみれば、「しろうさぎ」は「素兎」であることが分かります。

故、此大國主神之兄弟、八十神坐。然皆國者、避於大國主神。所以避者、其八十神、各有欲婚稻羽之八上比賣之心、共行稻羽時、於大穴牟遲神負帒、爲從者率往。於是、到氣多之前時、裸菟伏也、爾八十神謂其菟云「汝將爲者、浴此海鹽、當風吹

而、伏高山尾上。」故其菟、從八十神之教而伏、爾其鹽隨乾、其身皮悉風見吹拆、故痛苦泣伏者、最後之來大穴牟遲神、見其菟言「何由、汝泣伏。」

まず、「しろうさぎ」は旅をする大国主命（大穴牟遲神）の兄弟と出会います。物語は次の通りです。

大穴牟遲神には８０もの兄弟の神々がおりました。この兄弟の神々は稲羽の國の八上比賣（ヤガミヒメ）という美しい姫のうわさを聞いて、結婚の申し込みに行こうと出かけます。この時、兄弟の神々は荷物を大穴牟遲神に持たせて先に行ってしまいます。

稲羽に向かった兄弟の神々が氣多之前（気多の岬）にやって来た時、砂浜に皮を剥がれて丸裸になったウサギが倒れて（裸菟伏）おりました。これを見た神様たちは面白がって、「その体を治したいのであれば、海の塩水を浴びて、高い山の尾根で風に吹かれたらいいよ」と教えます。

その通りにしたウサギは、塩水は肌に沁みるし、風が吹くとその肌が乾燥しひび割れして、痛くて仕方がなく、泣いておりました。そこに大穴牟遲神が遅れてやってきて、ウサギに「どうして、泣いているのか（原典；何由、汝泣伏。）」と聞きます。

ウサギは答えます。「私は隠岐の島に住むウサギです。いつか、この地（因幡）に渡ろうと思ったのですが、渡る方法がありません。そこで、海の鮫（原典：和邇＝わに）を騙して海を渡ろうと考えました。『お前の仲間と私の仲間のどちらが多いか、比べてみよう。数えてやるから、仲間を呼んでおいでよ』と鮫に言うと、それを信じて集まった鮫たちは、島から氣多之前まで並んでくれました。」

「私はうまくいったと、鮫の数を数えるふりをしながら、鮫の背中を跳んで海を渡って来ました。」「そして、あと一歩で浜にたどり着くところで（原典：今將下地時）、嬉しくなって『私は海を渡りたくてあなた方を騙したんだよ』と思わず言ってしまいました。そしたら、一番端っこの鮫が私を捕まえて、毛皮をはぎ取ってしまいました。（原典：最端和邇、捕我悉剥我衣服）。ところが、先ほど通りかかった神様たちは、『海の水を浴びて、風に当たれば治る。（原典：浴海鹽、當風伏。）』とおっしゃいました。その通りにしたところ、私の体は悉く傷ついてしまいました。（原典：爲如教者、我身悉傷。）」

それを聞いた大穴牟遲神は、「すぐ川に行って、川の水で体を洗いなさい。そして、川辺に生える蒲黄（がまのはな＝蒲の穂）を取って、蒲の穂をほぐしてそれを敷き散らして、その上に体を転がせば、お前の体は元通りになるよ。」と教えた。ウサギは

教えられた通りにしたところ、体の傷は治って元通りになりました。（原典：今急往此水門、以水洗汝身、卽取其水門之蒲黄、敷散而、輾轉其上者、汝身如本膚必差。）

（注：水門＝河口　水洗身＝体を真水で洗え）

このウサギは大穴牟遲神に向かって言いました。「あなたの兄弟の神々は八上比賣と結婚することは出来ないでしょう。八上比賣は大きな荷物を背負ったあなたを夫に選ぶでしょう。（原典：此八十神者、必不得八上比賣。雖負帑、汝命獲之。）」

結婚を申し込みに来た神様たちに八上比賣は「あなた方のお申し出はお受け出来ません。私は大穴牟遲神に嫁ぎます。」と伝えました。（原典：吾者、不聞汝等之言。將嫁大穴牟遲神。）

戦前の教科書の挿絵

（２）八十神の迫害

八上比賣の言葉に兄弟の神々は怒り狂いました。いつも従者のように扱っている、風采の上がらぬ大穴牟遲神をどうして選ぶんだ、と。

① 赤猪

そこで、兄弟の神々は、大穴牟遲神を殺してしまおう、と相談します。そして、出雲に戻る帰り道、伯伎國（ははきのくに）の山本というところで、大穴牟遲神に対して言います。「この山には大きな赤猪（あかいのしし）がいる。我らでその猪を追い落とすので、お前は山の下で待っていて、それを捕まえろよ。もし捕まえられなかったら、お前を殺すからな。」しかし、その山には赤猪はいなくて、神々は猪に似た大きな石を真っ赤に焼いて、転がり落としました。

山の麓で待ち換えていた大穴牟遲神は、転がり落ちてくる石を突進してくる猪だと思って、そいつを両手を広げて受け止めます。受け止めたのは猪ではなく、真っ赤に焼けた石だったので、大穴牟遲神は大火傷して、大石に押しつぶされて、死んでしまいます。（原典：以火燒似猪大石而轉落、爾追下取時、卽於其石所燒著而死。）

大穴牟遲神が死んだことを知ったお母さんの神（御祖命＝みおやのみこと）は、嘆き悲しみ、高天原に上り、神產巢日之命（かみむすひのみこと）に息子の命を救ってくれるよう、お願いしました（原典：哭患而參上于天、請神產巢日之命。）。

神產巢日之命はその願いを受け入れ、二柱の女神を地上に遣わしてくれました。その二柱の女神とはキサガイ姫とウムガイ姫（原典：蚶貝比賣、蛤貝比賣）という貝の化身でした。二柱の女神は貝殻を削った粉と、蛤の汁（母乳に似ている）を混ぜて、薬を作りました。そして、その薬を大穴牟遲神に塗ると、麗しい壮夫（おとこ）として蘇り、そのあたりを歩き始めました。（原典：成麗壯夫訓壯夫云袁等古而出遊行）

（注：キサ貝＝赤貝　ウム貝＝蛤）

二柱の貝の女神は、貝殻の粉と蛤の汁を混ぜ合わせて秘薬を調合し、それを患部に塗って火傷の治療をしたのみならず、大穴牟遲神を今風に言えばイケメンに変えた、というお話であります。整形手術もしたのではないでしょうか。

② 強大な木の割れ目

大穴牟遲神が生き返ったということを知った兄弟の神々は黙ってはいない。再び策を巡らし、大穴牟遲神を亡き者にしようとします。

神々たちは、巨大な木に割れ目を作り、そこに茹矢（ひめや＝くさび）を打ち込んだ。大穴牟遲神をその割れ目に誘い込んでおいて、その氷目矢（ひめや＝くさび）を

引き抜いて、挟み殺してしまいます。（原典：切伏大樹、茹矢打立其木、令入其中、卽打離其氷目矢而、拷殺也。）

それを知った御祖命が木の割れ目から大穴牟遲神を救い出し、また生き返らせます。

③ 木の国への逃亡　そして根の堅州國（ねのかたすくに）へ

御祖の命が大穴牟遲神に言います。「ここにいたのでは、お前は兄弟の神々に殺されてしまうよ。（原典：「汝有此間者、遂爲八十神所滅。」）木の國（紀伊の国）の大屋毘古神（おおやびこのかみ）のもとにお逃げなさい。」そこで、大穴牟遲神は木の國に逃げるのであります。しかし、それを聞きつけ、兄弟の神々はそこにも追っかけて来ます。そして、大屋毘古神の家に矢を射かけてきて、大穴牟遲神を引き渡せ、迫ってきました。

もう逃げ場はないと考えた大屋毘古神は大穴牟遲神に言います。「あの木の俣をくぐって逃げなさい。くぐりぬけると地の底の世界に通じる道があります。その道を通って、須佐能男命（すさのうのみこと）が住んでおられる根の堅州國にお行きなさい。須佐能男命がよく取り計らってくれるでしょう。（原典：自木俣漏逃而云「可參向須佐能男命所坐之根堅州國、必其大神議也。」　（続く）

大国主命はこのストーリーの部分では大穴牟遲神という名で表されておりますが、大国主命のお名前の一つに葦原色許男（あしはらのしこお）というお名前があります。名は体を表すと言う通り、風采があまりよくなかったのかも知れません。そして、八十神（兄弟の神々）からは旅の荷物持ち（袋担ぎ）の従者のような扱いを受けていました。その風采上がらぬ袋担ぎが八上比賣から嫁ぎますと言われるなんて、「あり得ない話だ」と八十神が思うのも無理からぬことです。当時、袋担ぎは賤業だった、と言われております。

八上比賣は大穴牟遲神の心根の優しさを見抜いていた、ということでしょう。あるいは、ウサギが先回りして、八上比賣に皮を剥がれた自分に対する、八十神と穴牟遲神の対応の違いを伝えていたのかも知れません。

　その後、火傷した大穴牟遲神は二柱の貝の女神により、火傷を治して貰うとともにイケメンにしてもらいます。（成麗壯夫）木の國から根の堅州國にたどり着いた大穴牟遲神は、さっそくモテ男振りを発揮します。